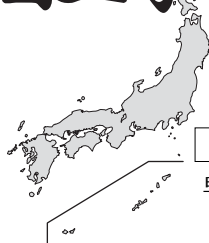


国土学事始め



大石久和

早稲田大学大学院
客員教授

前回は、古代官道のロマンを紹介しました。この官道が造られた奈良時代の中頃に、日本初の歌集「万葉集」が編纂されました。約4500首もの古代人の心の叫びが収録されていますが、すべて万葉仮名といわれる漢字表記となっています。

この万葉集には「みち」と発音して道路を意味する歌が、154首も収められています。

ます。

歌集には恋愛の歌が多く収められています。

道は男女の出会いの場所でもあり、恋を語る場所でもありますから、多いのは不思議ではありません。時代は下りますが江戸時代になりますと、浄瑠璃や歌舞伎で「道行

道は「美知」

き」といえば、恋人同士の駆け落ちなどの道中を表す言葉となっています。

万葉集には「みち」と読ませる漢字が4種使われています。それは現在でも道路を意味する「道・路・径」に加えて、当て字の「美知」という

表記なのです。使用頻度を見ると、第1位が道、2位が路、

そして3位が美知となっていてます。

これは驚くべきことだと思います。何と古代日本人は、道を「美しく知る」ためのものと理解していたと考えられるのです。

峠の向こうから珍しい人や物がやってくる。おいしいも

美しく知る

のや美しいものもやってくる。自分も峠の先に出かけ、日頃経験できないことを

経験する。

彼らはそのツールとして、道をとらえていたと考えられるのです。

また、「知るを行う」と書けば知行となります。この言葉は地域で政務を取り扱った

り、人々や土地・財産を直接支配することを意味します。美知は、美しく国を治めるとも読めるのです。

民衆に愛され支持されるために地域を支配するツールとして、道路はとらえられているのではないかと考えられます。

道を「美知」と書き表した万葉人の心情に思いを致したいのです。道は、人工の造営物としてもっとも身近なものです。建設や管理にもっとも手間のかかるものでもあります。

だからこそ道の効用を理解して大切にしてきた日本人の心が、この表記から感じられてならないのです。現代のわれわれも、道の意味と心をよく再認識したいとあらためて思います。